廣井博士一週忌に際し謹んで岡崎博士の一文を掲ぐ

故廣井先生の冒險と義俠心の發露

支那營口遼河工程局
工學博士　岡　崎　文　吉

本文は岡崎博士が故廣井博士の傳記資料として最近寄稿されたものであるが、傳記に載せ切れない點もあるので、爰に一應全文を掲載する事にした。恰度廣井博士の一週期に際し、最初の教えを受けられた岡崎博士の稿を得た事は故博士の靈に手向ける何よりのものである。(編者)

廣井先生が獨逸の留學を了へ歸國せられ、札幌に創設の工學科（當時札幌農學校内に其農學科と相對して設置せるもの）の教鞭を取られたるに際し、余は最初の工學生の一人として其薫陶を受け、卒業後も常に眷顧を受け居たるの關係上、玆に先生の義俠と冒險に關する逸話の一片を掲げて、先生の德を紀念するの光榮を有す。

余は明治二十四年北海の天地猶半ば氷雪に鎖されたる初春の候、先生の引率の下に工學生の一員として札幌、室蘭間の修學旅行に參加したりしが、出發の初日は、乘馬の都合にて鵡松驛より夜乘を强行して深夜苫小牧驛に投宿、翌日白老驛にて一學生に割當られたる驛馬は頗る狂暴的の態度を取り、容易に客を近けず、爲に一同危惧の念を懷けるを見て先生曰く、是れ難物なり、學生に危害を與へては一大事なりと、自ら危險を冒して其狂馬に乘換へんとせられし故に、余は之を諫止して他の驛馬と狂馬を交換せしむることを望みしも、之を聽かずして先生は遂に懸案の難物に騎乘せられたり。余は窃に其安否を懸念しつゝ隨行したりしが、先生は辛ふじて狂馬を馭しつゝ幸ひに奇禍に遭遇せずして一同を其目的地、室蘭に護送せられたり。

此日先生の義俠心と、冒險と、辛苦とは甚しく余が年少時の神經に刺戟と感動を與へたり。爾來先生は屢々同樣の態度を繰返され、克く謂ゆる大丈夫の度胸を保たれたり。從て余の接し得たる何人よりも勝れて常に死の覺悟を持つて事に當り居られたをことを直感せり。蓋し其天職として直接に天然力と戰ふことを要する場合多き技術家に取りては、最も必要なる覺悟なるべけれゝばなり。

春風秋雨幾十年の後、余は母國を離れて偶々一種の國際管理の下に遂行する支那の治水事業を擔任することゝなり、幾多の日支人を率ひて黃塵萬丈裏、馬賊跋扈の僻陬に起臥し又何等衛生の設備なき寒村に出入するの必要を生じ、轉た故先生の冒險に現はれたる義俠心を追想し、之に鑑み、何時不慮の災厄に斃れ滿洲の土と化するも、之に甘んずるの覺悟を起し、犧牲的に挺身して危地に出入し、又成るべく下僚と辛苦を共にするに努め、懸案の事業の遂行が獨り支那の國家百年の長計たるのみならず、又惹て我國の名譽に關する所以なるを思ひ、斯る冒險に暴露して常に生死を度外に措きて顧みざりしは、確かに先生の氣風の一端に感化せられたるを自覺し、是即ち先生に酬ゆるの一端なるべきを悟り、勵みて止まざりき。幸に懸案事業を遂行して一段落を告げたるを以て、昨秋支那より直に第三回の洋行を試むるに際し、上記の冒險事業の終了の旨を先生に報告して安堵を請ひしも、亞歐山海萬里の旅程を歷て紐育市に達したるときLバーT教授より先生の訃音を傳聞し、初めて驚愕し、其日取りより推算して曩きの拙簡が先生の臨終に間に合はざりしを知り甚しく遺憾とし、只當時異境の東天を空しく眺めて、先生の聲咳に接し得ざるを悲めり。今玆に之を掲げて先生の義俠と冒險を紀念せんとす。